

こうづ 神津
りきお 里季生

● 連合・事務局長

「こだわり」と「ひろがり」

年のはじめぐらいは景気の良い話といきたいところですが、昨今、本質を突いた議論があまりにも置き去りにされがちなことについて、どうしても一言いわずにはおれません。

<本質の議論はどこへいった？>

例えば、「女性が輝く社会」、「若者が将来に夢や希望を持てる社会」を掲げながら、実際には多くの女性や若者を一生涯不安定かつ低処遇な雇用に追いやりかねない労働者派遣法の改悪案は、その最たるものでした。連合として6年ぶりの国会前での座り込み、怒りをタスキに託したアピールリレーなど、全国の仲間が思いをつないだ成果もあり、2度目の廃案に追い込むことができましたが、まだ油断はできません。

ホワイトカラー・エグゼンプション導入を目論む動きも、年収や職務で線引きをしたところで、働くことに思いを込める日本人の心性に悪乗りする向きがなくなる訳ではありません。そもそも、これは規制うんぬんの問題ではなく、つとめてマネジメントのありように帰する問題であるはずです。それを規制緩和という他力本願に依拠しなければならないのは本末転倒であり、そのような経営が持続可能であるはずがありません。やはり、労働の資源には限りがあるということを出発点に、働く者の命と健康、家庭や社会とのかかわりを守りながら、いかにして生産性を高めていくかを労使が真摯に追求していくしかないのです。

解雇の「金銭救済」制度も、「救済」という何か働く者が救われるかのような言葉が使われていますが、結局のところカネさえ払えばいくらでもクビを切れると言うのであれば、救われるのは使用者だけということになりかねません。

「異次元の」という宣伝文句も、いつまで使うつもりなのでしょう。ある辞書では、「異次元」とは「われわれの住んでいる現実の空間とは別の所」だと説明しています。現実の社会で日々を懸命に生きる人々に届かぬ政策であれば、それは「まやかし」に他なりません。耳あたりの良い、あるいは不都合を糊塗するかのようなキャッチフレーズに頼る政治、売ればそれで良いと言わんばかりに目新しいキーワードに飛びつくメディアの姿勢。求められているのは、現場の実態や物事の本質を突いた深みのある政策議論であり、真の意味での分かりやすさなのですが。

<私たちの生活はリセットできない>

そして極めつけが、降って湧いたような解散・総選挙でした。表向きの理由は景気への配慮と消費税率引き上げ先送りの是非だったかもしれませんが、それこそアベノミクスは一体誰のためのものだったのか。あの議員定数削減を含めた三党合意は何だったのか。社会保障の改革や女性の活躍促進はどうしたのか。そもそも政治とカネの問題や安全保障政策をめぐる独走などで国民の不満を招いたのは誰なのか。そんなことはお構いなしに、政



権延命のために、それまでこだわりを見せていたはずの事柄を、まるでゲームのリセットボタンを押すかのようにあっさりと投げ打ってしまう。いったい国民のことを何だと思っているのかと言わざるを得ません。金融緩和による物価上昇の影響を受けながら、子育てや介護の支援を待ちわびている私たちの生活は「リセット」できないのです。執筆時点で選挙結果は出ていませんが、働く現場や生活の実態に立脚した政治勢力の拡大を求める歩みに終わりはありません。

<「こだわり」「ひろがり」のある闘いに>

いずれにしても、デフレから脱却し、好循環を確実に軌道へ乗せる上で、今が瀬戸際であることに変わりありません。そのなかで迎えている2015春季生活闘争が、昨年とは比べものにならぬほど難しい環境のもとでのたたかいとなることも想像に難くありません。しかし、先行きが見えにくい時だからこそ、働く者の思いをつないだ軸のある要求をし、こだわりをもって交渉することで、その先を照らし出していかなければなりません。

こだわりの軸は、非正規雇用や中小企業で働く仲間をはじめとした、社会全体の「底上げ・底支え」、「格差是正」であり、そのために「賃上げ」、「時短」、「政策・制度の実現」に徹底して取り組むことです。

その上で、「ひろがり」を持った取り組みにしていくことにもこだわりたいと考えます。ひとつは時間軸のひろがりであり、昨年から

の流れを引き継いだ、働く者を起点とする好循環を作り出す運動のタスキを、確実に次につないでいくことです。もうひとつは地域や社会へのひろがりです。これまでも春季生活闘争は、その社会的な波及力を発揮してきました。それは衆目の一致するところですが、その一方で、労働運動として、みずからの思いを組織の枠の外に向かって広げ、理解を得ることがどこまで出来ていたのか、そのことが問われています。我が国が人口減少社会に突入し、地域経済の先行きに懸念が広がっている中であって、その土地で共に働き生活する者の集団として、地域への思いを発信していくことが大切です。今次闘争では、新たな試みとして、地域の活性化や雇用確保のために、それぞれ何が出来得るのか、経営者から研究者、市民団体、行政、地方議員に至る多様な人々と議論し連携をひろげるフォーラムを開催することにしています。その積み重ねによって、国民的取り組みとしての春季生活闘争の新たな地平を切り拓くことができればと考えます。

「群羊を駆りて猛虎を攻む」という故事成語があります。一人ひとりの力はわずかでも、力を合わせれば何事かを成すことができる。難しい時期だからこそ、原点に立ち返り、一人ひとりの「こだわり」をつなぎ、「ひろがり」を持った運動を作り出して行く。そんな1年にしていきたいと考えます。